

小学生の部 優秀賞

「忘れないよ、
財前さん」



なが おか いずみ
長岡 和泉
宮崎県宮崎市
12歳・小学6年

「ブルルル」

私は、いやな予感がした。電話で話している母の声がふるえていた。それは、財前さんが亡くなったという知らせだった。財前さんとは、私のばあちゃんがお世話になっていて、グループホーム「かあさんの家」で暮らしていた、末期がのおじいちゃんだ。

私たち家族は、知らせを受けた後、財前さんのもとにかけつけた。財前さんは、おにのにおしやれな黒いぼうしを胸に乗せ、気持ちよさそうにねているようだった。私たちは、お線香をあげ、手を合わせて拜んだ。

「財前さんが死んでしまって、とても悲しいです。でも、楽しい思い出を、たくさんありがとうございます。ごさいます。財前さんのことは、ずっと忘れません」

そう、心の中でつぶやいた。苦しそうじゃなく、おだやかにねむっているような顔を見て、なんだかほっとした。

横浜のマンションで、一人暮らしだった財前さん。この遠い宮崎にやってきた時、すでに、あと数か月の命と言われていたそうだった。

初めて財前さんに会ったとき、

「たれ？ このおじさん。何しにきたのかな」とふしぎに思った。なぜなら、すくなく元気そうでした。しっかりしていたからだ。

財前さんは、優しくかった。私の本当のおじいちゃんみたいだった。お弁当を持って、いっしょに花見に行ったり、ごはんを食へに行ったり、散歩したりした。財前さんの部屋にもよく遊びに行って、私の話を聞いてもらった。

ところが、宮崎に来て、1年過ぎたころ。少しずつ財前さんの容体が悪くなってきた。部屋できつそうにして横になる時間が多くなってきたのだ。私は、それを見ると、いつものように部屋に入ることが、できなかつた。

がんで、おなかの胃をほとんどとってしまっている財前さん。しだいに、ごはんを食へることも、つらそうになっていった。いたそうなおなかをさすりながら、無理してごはんを食へていた。歩くときも、いたみをこらえながら、かべをささえにして、ゆっくりと一歩ずつ足を動かしていた。そのとき、私は、なにか声をかけてあげたかった。でも、できなかつた。あまりにもつらそうで、なんといいのかわからなかつたからだ。ただ、じつと見つめていることしかできなかつた。

7月。財前さんが宮崎に来て、一年半が過ぎていた。とうとう財前さんは、ベッドから起きあがることができなくなつた。

「財前さん、こんにちは」

「……こんにちは、和泉ちゃん」

ねむっていた目をあけて、にこっと、あいさつを返してくれた。数日後、私がいさつをする時、目をあけて深くうなずいてくれた。さらに数日後、目はとじたまま、うなずくだけになつた。最後の数日間、私が声をかけても、うなずくこともできなかつた。

あんなに元気だったのに、食へることも、トイレも、話すことも、なにもかもできなくなつてしまった。手や足も、私よりずっと細くなつた。財前さんは、いったいどんな気持ちだっただろう。全身が、いたくてたまらなかつたにちがいない。このままどうなっていくのかを考えると、不安でおしつぶされそうになつた。きつと、いろんな気持ちがあつたと思う。

でも財前さんはきつと、こう感じてくれていたと思う。独りぼっちじゃなく、ここでみんなといっしょに、最後まで過ごせて良かったなあ。

私のチ力ばあちゃんとも、「かあさんの家」にいるおじいちゃん、おばあちゃんたちとも、いつか必ずお別れのときがくる。だから、おばあちゃんたちと過ごす時間を、大切にしたい。私にできることは、ほんの小さなことだ。それは、いっしょにおしゃべりしたり、いっしょに遊んだりすること。こんなことしかできないけど、なにか少しでも役に立ちたい。そして、みんなには、生きていてる時間を最後まで、楽しく過ごしてもらえようと思つた。

チ力ばあちゃんは、今日も元気にしてるかなあ。トメ子ばあちゃんは、歩く練習をがんばっているかなあ。ウメノばあちゃんは、私の名前を思い出してくれるかなあ。ひろあきじいちゃん、今日もじょうだんを言っているのかなあ。みんなとどんなおしゃべりしようかなあ。

おじいちゃん、おばあちゃんたちの顔を思い浮かべながら、今日も私は、自転車のペダルをこいで「かあさんの家」に行く。